

帝国主義の世界再分割に対し、世界革命の旗幟を鮮明にし、我々の安保政治決戦を斗い抜け！
インターナショナルス佐世保寄港実力阻止、脱走米兵実力防犯の斗いで、日米スロレタリーアート人民の国際主義を深めよ！

オスオ4の羽田斗争を作り出し、破防法適用を粉砕せよ！

〈現代帝国主義と我々の安保斗争の展望〉

10月、11月2日斗争は「国際主義」と「組織的防共暴力」が、我々の安保斗争の今後の階級斗争の主導的役割を担うことを示した。

我々の安保斗争は、4年来、我々の主張してきたオスオ4階級斗争の基本的性格をもつてい

たつて、総括と展望の基本的な方向は、「国際主義」「組織的防共暴力」の視点から、「オスオ4階級斗争」を再構成することである。

オスオ4階級斗争の弱点は次の様に整理される。

① 1930年代前半のE.E.C.日本の高度成長の停滞を世界資本主義の運動の同時性の回復として捉え、ベトナム人民武装斗争の中に世界革命への永続性を見抜き、「国際的階級斗争の結合」を主張した。

弱点は世界資本主義の同時性と世界革命への永続性との内的な連続、即ち帝国主義の市場再分割なE.E.C.先進国市場から先進国市場へ拡大すること及び、これを媒介として、先進国から先進国へ世界革命の永続性を発展することであることを明確にこえなかつたことである。(帝国主義論と世界革命論)

② 高度成長という内的膨張の終了、経済的不況の開始と、公営買収と「安保斗争」を基礎とする伝統的価値

金の故に形成される官公営「公営」の戦斗性に注目し、公営買収なら民間への経済スリの拡大、ゼネスト、政治問題代り、組合内閣ストの中より予見し、「経済斗争の政治斗争へ発展する」とした。

この弱点は次の2点である。オスオ4階級斗争の徹底的なゼネストと「経済斗争の徹底的な政治斗争」に在る政治は「組合主義的政治」であり、必ず議会主義、取り引きに取約されるという原則を大衆斗争のダイナミズムの中で過小評価し反ことである。オスオ4階級斗争の弱点は「大衆斗争を党をつくる」という我々の組織的価値を劣化戦線に在るは、学生運動に在る政治斗争への注目と対照的に、至極斗争に注目した点である。

このことは、政治斗争「反戦斗争」に在る立ち遅れを正して、本国的日本広島反戦集会に在る血核派の一定の立ち遅れとなつたのである。又、地区反戦と労研社研と、この2つの組織戦術の間の関係の不明確さとして今なお残存している。

③ 詳細に口取用されず、④の内容の中に現在して主張されたことである。④「経済斗争と政治斗争の結合、社会政治斗争、オスオ4階級」ということを主張してきた。この「ゼネスト、生産管理、武装

と、このソサイエト、スロレタリー独裁をテーマとしていっていることは明白である。ここを弱点となつたのは「大衆斗争を党をつくる」という我々の価値であった。オスオ4階級斗争は、社会政治斗争、オスオ4階級を大衆と明確に区別された特殊な、高知的な部隊「党」として建設することである。大衆斗争として実現しなかつた。大衆斗争に在る赤色主義、党建設に在る解党主義にみち入つたことである。オスオ4階級斗争の時期に党建設「スロレタリー」再建設「スロレタリー」を行なうことである。それが大衆斗争の高揚、暴力の激化的弾圧の時期である現時点にまで引き延ばされ、極めて困難な状況を迎えていることである。

オスオ4階級斗争や全潮流にまつて受け入れられている。「国際階級斗争の結合」「経済斗争と政治斗争の結合」は共通の状況認識となつた。我々のオスオ4階級斗争の状況は、世界革命、暴口革命「スロレタリー」独裁、へ向けて戦略化する作業にこじかかっている。そのときの暴口の視点は「国際主義」と「組織的防共暴力」である。と同時に、「このこと」の作業は、「大衆斗争を党をつくる」という我々の伝統的組織価値を克服することである。我々を我々の安保斗争の主義部隊とするにしよう。

このことは、政治斗争「反戦斗争」に在る立ち遅れを正して、本国的日本広島反戦集会に在る血核派の一定の立ち遅れとなつたのである。又、地区反戦と労研社研と、この2つの組織戦術の間の関係の不明確さとして今なお残存している。

現局面の世界資本主義の運動の
特徴は、各口資本主義の平等化を
望むに、諸口主義の全面的な世
界再分割を開始していることであ
る。

(1) 重化学工業化に於る各口資本主
義の不均等発展を終了し、平等化
を基本的特徴となす。

石油—鉄鋼—機械—化学を主軸
とする重化学工業化は不均等発展
として実現され、1930年代
から第二次大戦前後へ至る米口の
それと、1950年代後半のEEC
C. 日本の設備投資主導—高度成
長である。

この各口の不均等発展は、19
60年代前半のEEC、日本の「
構造的不況」を転機に、平等化局
面に入り、米口について EEC
日本との膨張期に入った。

(2) 先進口市場は「自由競争」なら
独占し世界企業の競争の時代に入
った。

EECに於る資本の動向は、今
や EECの高度成長—高利油を
要因としている。1960年代
前半以降、高度成長—不均等発展
を終了した。米口は独占地位に立
ち、欧州本社の設立と欧州資本市場
からの起債、EEC各口資本面の
結合—欧州企業の出現という事態
は、利潤率の高位による資本の回
路的自由移動の時代を終り、世
界的な展望に立つて、勢力圏を争
う独占し世界企業の運動が始まる
EECを示している。

(3) 先進口市場の分割と、国家的結
合を軸に展開されている。
世界企業の論理は、目前の利油
をめぐり、世界的長期的利油—勢力
圏であり、重化学工業化に向けて
の不均等発展の時代に低下した後
進口市場の位置を再上昇させた。

石油—鉄鋼—機械—化学を主軸
とする重化学工業化は、先進口

場から、むしろ、軽工業、中小企
業を中心とした先進口の過剰生産
力の輸出、生産削減による工業製
品輸出市場に変化させ、先進口—
先進口の新しい結合をたらし、
米—中南米の結合に対する EEC
—バルカン—マフリカ諸口—準
加盟口化、日本の東南アジア太
平洋地域開発構想というこの分野
での不均等発展の始まりである。
諸口主義は口国家資本輸出、借款
と先進口の生産削減を推進し、同
時にこのことにより、口内別資本
本に目前の利油を保障し、かつ、
口内産業構造の重化学工業化を、
計画経済、総利経済、産業政策と
して推進している。

だが、重要なことは次の二点で
ある。カ—に経済開発とは原始蓄
積—農民の土地からの追放—修繕
金貸付の創出の強制であり、そ
れは後進国の階級斗争の激化を促
進し、先進口マルジョアジーをこ
てますます諸口主義との結合を強
化させることである。カ—はこの
ことは、国家資本輸出が垂直的な
口国家結合としてなされる事情と
あり、かつ、争うる経済的再分割
として示す。米—先進口間の一
元的結合の形成、政治的再分割の
EEC、日本が登場する（口内は
この点である）。

以上のことは、諸口主義が、
世界の経済的分割から政治的再分
割へ進みつつあることを示してい
る。

(4) 帝国主義世界体制の存在は、帝
国主義の世界再分割を否定するの
必要なく、その後継、矛盾の形成
を強化させる。

IMF—マルタ体制という帝国
主義世界体制は世界再分割を否定
するものではない。それは、カ—
次第口主義世界戦争の結果を米帝
国主義の一元的世界支配として固
定したものである。経済的—政

治的不均等発展とその平等化に
より変化は不可避である。重化学
工業化—再分割へ向けての諸口
主義の同質化、米—ソ核独占を真
実とするマルタ体制を打ち破るハ
ク、独自の核を追求している。

帝国主義世界体制と帝国主義の
世界再分割の観点から、カ—は
カ—第二次大戦の性格を検討しよう。
カ—第二次大戦の特徴は、口内重工
業—植民地原料市場という産業構
造の同質性の上に、諸口主義が
植民地獲得へ向け対外膨張政策を
展開し、植民地侵略戦争—口内入
労働者階級を包摂し—この問題を
めぐって超過利潤による日和見主
義は、城内平和—社会排外主義—
同質化した。世界分割—再分割を
通して世界戦争へ突入したことであ
る。

カ—第二次大戦の特徴は、再建資本
位制—ワエルサイエ体制の下で、
敗戦及び後進諸口主義への独、日
争い、米口の産業構造—最初の重
化学工業化—に同質化せず、軍
争いにおいても劣勢のまま、経済
的—政治的危機をこの最も弱い階
層—中小資本—マル、ル—口
—に集中させ、危機を以自体の組
織化—ファシズムとして登場し、
帝国主義世界体制との不断の衝突
—局地的帝国主義戦争—を通じて
世界戦争へ突入したことがある。

現在の事態の特徴は、植民地戦
争—世界戦争というユースと、局
地戦争—世界戦争の両—又、同
時的に進行している。諸口主義
はこの最も困難な正面戦を余
儀なくされている。何故なら、東
に東をきたすつた、帝国主義世界
体制下で EEC、日本帝国主義
が、その打開策の改革、経済的—
政治的力量の米帝国主義への同質
化を行ないつつあり、他方、マル
タ体制はワエルサイエ体制よりも
はるかに強固な帝国主義世界体制

米帝主義は、内部に、E.E.C. 内部への介入、大西洋系、太平洋戦争和平派を反主流派として含みつつも、現実のE.E.C.の保護主義の台頭と、ハトナム人民武装戦争の激化の中で、太平洋系、ハトナム戦争強硬派の主導下に、その世界戦略の基調を、ヤルタ体制を維持し、E.E.C.の世界再分割への準備を阻止する方向に向っており、その中で、ハトナム反革命戦争の早日米守保を位置している。米上は、ハトナムを真実とする前進人民武装戦争を抑制するつもり、米上は、E.E.C.の台頭に於ける、核独占を真実とする米ソ間の力の均衡、平和共存の危機を、日本、中国の力の均衡関係の創出に於いて補充、E.E.C.の反戦和平を平和共有を再収約すること、米上は、植民地戦争を日本に肩代りさせ、過度の経済軍事化、対E.E.C.競争力低下、E.E.C.経済危機、黒人斗争の連鎖を終束させ、かつ、軍需費の流出、ドル危機を解決することである。

言ひまごとなし、米守保は、日本帝主義の世界戦略の中心である。日本帝主義は、東南アジア太平洋地域開発構想として経済的勢力圏の展望を設定し、この地域のマルシヨアミーと国家資本輸出、借款を媒介に結合し、軽工業中小企業、農業とこのE.E.C.過剰生産力をこの地帯へ輸出し、ここに於ける至済開発に有機的に組み込ませしめようとする。そのことによつて、E.E.C.重工業の市場問題の解決をはたつていく。そこで、E.E.C.内産業構造の一層の重工業工業化をなす対外的展望の下に計画的憲法的に推し進めている。大都市に集中し、都市問題、公害問題を引き起こす重工業の工業の全E.E.C.農業、漁業地帯への拡張

その為の流通機構の合理化である。交通、運輸、通信関係の合理化であり、社会開発、社会資本の充実の内面であり、E.E.C.都市交通、郵便、電信電話の合理化、対外的展望は、E.E.C.の教育、日教組への攻撃とこと、特殊の政治的軍事性格をこころくのである。

E.E.C.、日本帝主義の世界戦略は、東南アジア政策は、今秋の一連の佐藤の外遊を契機として、急速に至済から政治軍事にその性格を転換しつつある。ハトナムを頂点とする右進人民の武装斗争を最も激烈に仕なわれ、かつ、それな米帝主義の世界支配体制を突き崩し、世界革命への永続性を獲得しつつあるのなその最大の要因である。従つて東南アジアマルシヨアミーの最大の懸心事は、この右進人民武装斗争とそれを支援するE.E.C.にあり、これと対抗しつつ軍事的政治的力量のみならず、日本帝主義の下に彼らを集結しつつあるのである。

日本帝主義は、東南アジア太平洋地域開発構想から、東南アジア共同防衛圏構想に転換を開始した。その内容は、沖縄を中心星地として、自衛隊を中軸として東南アジア侵略軍事体制である。ここに於て、自衛隊の強化は、帝主義軍隊は、帝主義的國家力の中心的地位を占めつつある。何故なら、それは、右進人民の武装斗争への海外派兵、E.E.C.への核武装、E.E.C.内の強权的抑圧による治外法権、ナシヨナリズムの物質的表現たる徴兵制の4点を内容とし、対外的対内的諸關係に於ける日本民族の位置のマルシヨアの総括、統合の内裏を有しているからである。

極東の軍事的存在は、沖縄を日本帝主義のいざなな権握するものは、東南アジアの軍事的ハザード

、従つて支那勢力圏の帰スウを決定する。従つて、日本帝主義にこつて、沖縄返還は、米守保の死活を決する向題である。

かくて、我々は、次の様に結論付けることのできる。米守保への向けて、日本帝主義は、世界再分割への困難な正面戦を開始した。その一面の正面及植民地戦争、東南アジア共同防衛圏構想であり、ハトナム参戦、E.E.C.の突破口である。他方の正面及局域戦争、帝主義軍隊であり、現在、沖縄返還、自衛隊の強化として進んでいる。

この正面戦は、米帝主義にこつてと同様であり、太平洋系と大西洋系への分裂を深めている。現局面の諸帝主義による世界再分割の正面戦を具体的にどうなるかは、E.E.C.の最終的に知らせるであろう。E.E.C.ヤルタ体制、日米守保とこの帝主義間の諸關係の中に、それを突き詰めてある力の動向を眺み、このこと、華命の情勢分析である。

次に、帝主義の世界再分割の時代は、世界革命とその挫折の時代であつた。E.E.C.の絶頂の上には、我々の路線を立てられなくてはならない。総括の中心は、帝主義の心臓に於ける革命の敗北、現代革命の敗北である。我々は、この向題に、E.E.C.主義と組織されE.E.C.の観点から迫らなければならない。

(5) 帝主義段階に於ける民族國家と労働者階級とE.E.C.との間に形成される状況の特徴を確認しておく。

① 独占—金融資本—金融寡頭制の至済的政治的全生活を支配し、帝主義な体制として完成することになり、生産階級を帝主義の

側に移行させ、超過利潤による買収を物質的基礎とする労働運動内の日和見主義の形成とそれの社会排外主義への不断的転化

②他民族抑圧と国内反動は、小ブル民主主義的反帝派を形成するがこの部分は労働者階級との結合なない限りプロミアズムの基礎とある。

総じて、帝主義的民族の発展コースはプロミアリズムへの吸引との階級的基礎を要にする之様の形態な社会排外主義とプロミアズムである。

①ロシア革命は現代革命のヘゲモニーな「国際主義」と「組織されたる暴力」であることを示している。この最大の教訓は、2月革命はプロミア革命、10月革命はロシア革命という硬直化した教条にあるのではなく、革命の全過程の永続性を構成したのには、プロに極めて具体化された国際主義であり、プロに組織された暴力である。

7. プロ大戦へ至る帝主義の国民統合原理は植民地への対外膨張であり、超過利潤による労働者階級の買収は日和見主義の形成と、それの植民地戦争に防衛への動員即ち社会排外主義への転化（城内平和）として支配を貫徹した。この事情は敗戦国（露・独）と戦勝国（英・仏・米）に在る革命斗争に大きな相違を与えた。

敗戦国で、植民地の喪失をプロにプロミアの統治能力を経済的に政治的に後退させ、自国をプロミアの打倒の展望を与えた。プロの告知のテーゼは、帝主義戦争を内戦へは、常に自国をプロミアの国民統合原理ナシのプロミアの対極に在らし、プロは帝主義の敗戦を媒介に、永続性を獲得し、具体化された国際主義となりえたのである。

次に注目すべきものは組織されたる暴力と兵士という構造である。この集団こそがロシア帝主義のナシプロミア共同幻想の形成とその破壊を身をとつて担った集団である。この集団の革命性にプロミアエウイキは注目し、軍隊への工作を意図的に進め、10月全国兵士ソビエトでの多数派を形成する。そして、この永続性を保障したのな労働者階級、赤軍兵士間の相互の信頼、援助（武装、生活、物質）であり、組織形態としてのソビエト、運動形態としての街頭での労働者の生命をかけた連帯にであった。プロ大戦後のロシア帝

国主義の危機と、労働者大衆の自然発生的暴動を、労働者、兵士、農民の権力に高め、クレールニン主義を成敗した要因は次のものである。プロに、労働者階級以外の他の諸階級、諸階級（農民、兵士）の戦斗力に注目し、組織された暴力によって軍事的ヘゲモニーを形成したこと、プロに、この兵士、労働者の結合を本質的にもたらすものとして国際主義を提起したことがある。プロに、告知の事実として、革命の指導者、前線革命の指導的階級としてのプロレタリアートを1905年の革命を含むロシアに於る全大衆運動の中で形成したことがある。

7. プロに、このロシア革命を突破口とする世界革命（ヨーロッパ革命）の戦勝をどの様に提起したのであるか。

敗戦国ロシアに在るこの一國革命を世界革命へ発展させることについては、プロ主義の世界支配（植民地支配）の打倒である以上、帝主義の心臓部、戦勝国に在る革命を必要であり、それは独自の要質の極点を要求した。

戦勝国ブルジョアジーは勝利の結果、国防への労働者階級の統合を強化し、植民地の拡大は労働者階級の買収の条件を強化している以上、敗戦国の如く、自国をプロミアの統治能力の后退した大衆の自然発生的性を相対的に身伴として、自国をプロミアの打倒、世界革命の戦略を設定すべきなり。

プロに、このロシア革命を突破口とする世界革命（ヨーロッパ革命）の戦勝をどの様に提起したのであるか。

プロに、このロシア革命を突破口とする世界革命（ヨーロッパ革命）の戦勝をどの様に提起したのであるか。

プロに、このロシア革命を突破口とする世界革命（ヨーロッパ革命）の戦勝をどの様に提起したのであるか。

プロに、このロシア革命を突破口とする世界革命（ヨーロッパ革命）の戦勝をどの様に提起したのであるか。

プロに、このロシア革命を突破口とする世界革命（ヨーロッパ革命）の戦勝をどの様に提起したのであるか。

3.

1の問題、即ち、社会党(SPD)からの前衛党の分離の問題、革命的オースロイテとの結合の問題は、1908年に開始されるドイツ革命に先行する時代に於て、ドイツ帝国内主義の植民地戦争に於て、政治的階級に成長することであり、極論するならば、至極の至りに於て徹底化は、至極の強力を生み出し、又このことは、その後のドイツ革命に於て決定的に重要であるが、それ自体、国民大衆の指目的階級としてのプロレタリアートの形成と、国際主義を形成することとは異なる。このことがドイツ帝国内主義の崩壊と共に、労働者階級の経済斗争の徹底化が進行して

も、それに政治的権力問題が提起されると、労働者階級の要求は組合主義の延長上に、SPD政府を要求し、かつワイマル連合を承認した。**2**の悲劇は、ルンペン、ホルムルの破壊力に注目し、この部隊を組織し、暴力的に革命側に登壇してなつたことにある。事実、1918-19年になつて、最も深い至極の危機にさらされたのは、ルンペン、ホルムペンであり、組織性を欠くことになったことがあったが、このことは本質的に政治的階級による、解決はなつておらず、**3**に、軍隊組織に援助を街頭での共同行動、ホルムペンの革命に於ける労働者と赤軍兵との関係の如く、物質・生活の援助に**4**に指導理念とこの四

つの階級によるホルワイ工団打倒、直接打倒による打倒の理念である。これは、プロレタリアートとホルム、ルンペンの結合を本質的に政治的にも、つまり、イタリヤに於ける至極の敗北とムッソリーニのファシズムの勝利は、**5**に労働者階級に於けるウニテイカリズム、それを許容したリッティ政府の相互補完関係に北

部工業界、基幹プロレタリアートのマロツクに、インテリトホルム南部農業のマロツクの打倒関係の中で、ムッソリーニの組織された暴力(学生を先導としてルンペン、ホルム)と帝国内主マシヨアリズムとの結合が勝利した。トリーノ工場評議会運動は、本質的に、マシヨアリズムを目標とし、政府、資本との対抗関係の中で自己の利益の増進を追求する限り、それ自体、即時的に革命的であるが、ウニテ、カリズムの敗北であり、大体至極工業界であるヨーロッパのマルクス主義者にとつて、プロレタリアート以外の階級に注目することは現実の問題として考えられなかった。この

帝国内主義世界体制下、至極的政治的力量と同質化しなかつた危機の特殊性に起因する。二の危機はホルム、ルンペン階級に先行し、これを階級崩壊とする共産党とナチスは、社会主義の国内路線(ウエルサイエ体制打倒)の方向への圧力を不断に下ろす受けていた。社会主義の客観的基礎は、**6**ナチスは、幻想の国際主義に於ける階級としてウエルサイエ体制打倒の路線を明確にし、この下に、ホルム、ルンペンの大衆運動を展開し、その中から組織された暴力、突撃隊を形成した。ナチスの二の方向は、危機の一層の進行の中ホルム、ルンペン、労働者階級を結集し、組織された

暴力、国防軍として完成した。共産党が勝利するためには、ウエルサイエ体制打倒、世界革命の戦勝の中心に世界革命を位置付けて提起したことはなかつた。このため、ホルム、ルンペン、労働者階級は同一の世界革命戦略の下で運動してあること、それと結合する(1)の展望をなした限り不可能であった。

帝国内主義世界体制下、至極的政治的力量と同質化しなかつた危機の特殊性に起因する。二の危機はホルム、ルンペン階級に先行し、これを階級崩壊とする共産党とナチスは、社会主義の国内路線(ウエルサイエ体制打倒)の方向への圧力を不断に下ろす受けていた。社会主義の客観的基礎は、**6**ナチスは、幻想の国際主義に於ける階級としてウエルサイエ体制打倒の路線を明確にし、この下に、ホルム、ルンペンの大衆運動を展開し、その中から組織された暴力、突撃隊を形成した。ナチスの二の方向は、危機の一層の進行の中ホルム、ルンペン、労働者階級を結集し、組織された

ホルム、ルンペンの破壊力に注目し、この部隊を組織し、暴力的に革命側に登壇してなつたことにある。事実、1918-19年になつて、最も深い至極の危機にさらされたのは、ルンペン、ホルムペンであり、組織性を欠くことになったことがあったが、このことは本質的に政治的階級による、解決はなつておらず、**3**に、軍隊組織に援助を街頭での共同行動、ホルムペンの革命に於ける労働者と赤軍兵との関係の如く、物質・生活の援助に**4**に指導理念とこの四

つの階級によるホルワイ工団打倒、直接打倒による打倒の理念である。これは、プロレタリアートとホルム、ルンペンの結合を本質的に政治的にも、つまり、イタリヤに於ける至極の敗北とムッソリーニのファシズムの勝利は、**5**に労働者階級に於けるウニテイカリズム、それを許容したリッティ政府の相互補完関係に北

部工業界、基幹プロレタリアートのマロツクに、インテリトホルム南部農業のマロツクの打倒関係の中で、ムッソリーニの組織された暴力(学生を先導としてルンペン、ホルム)と帝国内主マシヨアリズムとの結合が勝利した。トリーノ工場評議会運動は、本質的に、マシヨアリズムを目標とし、政府、資本との対抗関係の中で自己の利益の増進を追求する限り、それ自体、即時的に革命的であるが、ウニテ、カリズムの敗北であり、大体至極工業界であるヨーロッパのマルクス主義者にとつて、プロレタリアート以外の階級に注目することは現実の問題として考えられなかった。この

帝国内主義世界体制下、至極的政治的力量と同質化しなかつた危機の特殊性に起因する。二の危機はホルム、ルンペン階級に先行し、これを階級崩壊とする共産党とナチスは、社会主義の国内路線(ウエルサイエ体制打倒)の方向への圧力を不断に下ろす受けていた。社会主義の客観的基礎は、**6**ナチスは、幻想の国際主義に於ける階級としてウエルサイエ体制打倒の路線を明確にし、この下に、ホルム、ルンペンの大衆運動を展開し、その中から組織された暴力、突撃隊を形成した。ナチスの二の方向は、危機の一層の進行の中ホルム、ルンペン、労働者階級を結集し、組織された

を媒介に仏革命を實現する戦略は「世界」一同時革命」戦略で仏共産党を形成され、この極めて具體化された国際主義の下に目的意識的な政治斗争の蓄積なない限り不可能であつた。しかし、仏共産党は、ロシア共産党の単純移植「自由マルシヨアミ」打倒し世界革命」戦略の導入として自然発生的に形成されたこと、即ち世界革命の中央指導部「インターナシヨナル」の仏支部として目的意識的に形成されたのではないという事情からして、ヴェルサイユ体制の崩壊の一因革命人民戦線「世界革命の敗北へ進んだのである。このことの不可能性が又著々、人民戦線の形成過程に於ける労働者階級の自然発生的な政治斗争の高揚の時代に、共産主義的政治と組合的政治即ち共産党と社民との相違を、なげける賃金要求の額の大さとの相違という同質的組合的政治の中の量的差違に歪曲化したのであり、組合的政治は政治斗争に於ける共産党と社会党の分裂な社会フアミズム論は未だ組合主義を他方に於ける裏返りとして形成したのである。

以上のヨーロッパ革命の敗北の中から我々を教訓として言ふべき点は次の通りである。

① ある局面に於て最も革命的な階級、階層、集団を組織し、その勢力として登場させること、その永続性を確保し、ロータリヤトとの結合によつて保障すること、即ち両者の街頭に於ける共同行動、物質形態をも含め、その後者から前者への援助である。そして、この組織は、その勢力の形成とそのプロレタリアートの結合に決定的な役割を演じた。国際主義は世界革命の戦略的戦術である。

② 至高的危機は破局に先行する時代に於て、具體化された国際主義に基く政治斗争を大膽に労働者階級に提起し、前夜の獲得と同時に、組織性を高める。

心した労働者階級を国民大衆全体の指導的階級に形成することである。このことをめざしては、フランスとスペインの至極な不平等に、至高的危機に於ける労働者階級の自然発生的斗争の徹底化「サンデイカリズム」とその中で形成される強大な暴力は、政治的権力向頭を要求されるべき、せいぜい政成の「エリート」への委任、即ち政成権力の交替を要求し、かつ承認するに止まるのである。フランス人民戦線の形成とその持続なパリの労働者のゼネストに支えられたものであるが、その域を一步も出なかつたこと、スペインではバルセロナのアナルコサンデイカリストが、反フランス武装斗争に完全な先進性を示したるなら、やはり、権力向頭を要求されたとき、共和政府に参加せざるをえなかつたこと、全てこの向頭なのである。

かくて、我々は、現代革命下の組織された暴力「国際主義」ゼネストの構造から追つてみるのである。その点から、目的意識性と自然発生性を統一しようとするのである。



次に深めるべき問題の①はヨーロッパ革命に於けるこの敗北と同質のことを戦後日本階級斗争の至極したことの総括、即ち戦後革命に於ける共産党、産別会議の敗北と、60日安保三池斗争に於ける「保メンドー」安保全學連、及び三池斗争の敗北の総括である。②は、①に於ては、焦点を革命斗争に権力をめぐる斗争の段階に設定した正の捨棄された、資本主義の安定の時代、即ち組合的政治「社民の大衆を獲得してこの時代に於ける共産主義的政治を如何に大衆と結合するかにこの問題である。このことは、戦後日本の階級斗争の牙をめた持続的な大衆性にあつたといふことからも特殊に重要である。

③ 戦後日本の階級斗争の牙をめた持続的な大衆性にあつたといふことからも特殊に重要である。

④ ② 次大戦による日本帝国主义の崩壊は、資本主義至極の破壊とマルシヨアミ支配の統治原理の崩壊の中で、至極な政治に先行する時代をたらしめた。自然発生的な労働者階級の徹底した斗争は、47年2月ゼネストを頂点とする「マルコサンデイカリズム」を形成し、米占領軍権力との対抗の中で、政治的権力向頭に至達した。しかし、前江（政治指導者としてこの）をこの斗争は、既に述べた過去の歴史的一因的至極と同じようである。結果として、特にその敗北の結果としてマルシヨアミ民主主義的政府の實現をもたらしめた。

⑤ 単なる「エリート」の交替によつて形成された「三」の政府の労働者大衆への無能力と中向的動揺は、左右の分裂を促進した。産別会議（本質的に「サンデイカリズム」の敗北）、その指導部であつた共産党の単線的な極左冒險主義への移行を生み出した。しかし、それとの対抗関係に於て、いまだ労働組合の大衆と組合「産別」産別民主化同盟の形成を生み出した。GHQは米占領軍権力の「テロ」で誕生した「三」の右派は、大衆の代表者である以上、情勢の転換とともに左傾化を始めた。

⑥ ①は国際情勢の転換、日本資本主義の再建を要因とする政治の登場である。それなサンフランシスコ講和条約、日米安保条約、朝鮮戦争である。②は、日本資本主義の脆弱性によつてまず労働組合大衆、ついで幹部の経済斗争に於ける「傾化」の民間左派の形成である。そして、この基礎の上に政治斗争に於ける「左派」社民左派の登場した。

⑦ ① 朝鮮戦争特需を契機として日本資本主義の近代学工業化高度成長の中で、労働運動特に民間大産産、産別資本との斗争に敗北し、② ① 戦後半の② ③ 戦後半の時代に入ることである。

少なくとも顕在化しなかつた原因は、既に確認してき如く、戦時的組合主義、ナショナルエカンテイナリズムとこの経済斗争の自然発生的高揚との合体は、政治的権力向動に直面的な討議を要求し、マルシヨア民主主義の政治を要求するといつて、史的に合理的な結果と同一ものである。

さて、日本マルシヨア主義にこの意味であつたことは、資本主義の発展からして、階級斗争の主体的条件ならして、この政治的権力向動の主導権を、社会党、兵産党といつて、民衆向動に渡すことなく、自らの下に掌握し之にことである。これを転換点としなから、至済の先行から政治の先行の時代への移行と、対外的ロツクの解体、公明民社の台頭を始まるのである。

この転換は「至済ナシヨナリズムの台頭と資本主義の対外的発展」といつて至済的色彩を濃くもつた適度期として始まつた。世界資本主義の不均衡発展の終アと平等化は、資本自由化をめぐり、国際競争の激化と対外的至済勢力圏の構築に諸所主義を向けた。日本帝国主義と日韓条約の締結として、対外的至済勢力圏の構築に向ひ、かつ、このことによつて、東南アジア危機の解決と日本資本主義の発展を切り開くといつて、至済ナシヨナリズムを提起して、この内容は現在、「東南アジア太平洋地域南発構想」「国内重化学工業の計画的発展」として一層体系化有理化総括化されてゐる。

日韓斗争の敗北の最大の要因は、高度成長といつて幻想の破壊過程と、至済ナシヨナリズムといつて新たな幻想の形成過程と同時的に進行して、おり、マルシヨア主義の統治原理などの中心を除々に至済から政治へ移行させつつあること、及びマルシヨア主義の操縦する政治の東南アジアを対象とする、国際的関係なら形成され、それと対抗して、ベトナム

人民の武装斗争を頂点とした、国際反帝斗争の展望、具体化され、国際主義を政治指導の質として要求されてゐることを認識し、之を三つ三つとある。

我々の提起した、至済斗争と政治斗争の結合、社会政治斗争といつて、三階級の最大の利益を、この政治、国際主義の主張にあり、階級形成に於ける至済主義的傾向を消したのである。

(3) 至済の先行から、政治の先行へ政治的権力向動のマルシヨア主義による全面化、換言するならば、至済主義的國家権力の形成などの様なる運動と構造を、つて進行するといつて、問題を、互保を尺度として、査定しなかつてはならぬ。

我々の既に述べた、完成されるべき帝国主義的國家権力の中心を「帝国主義軍隊」であると結論付けた。何故なら、後進人民武装斗争といつて、世界革命の「継続」を「暴力」の永續性に規定されて、日本帝国主義の世界戦略、東南アジア政策、東南アジア太平洋地域南発構想、国内重化学工業の計画的発展、東南アジア共同防衛防衛團構想、海軍主義軍隊の連帯の急速に移行しつつあるからである。国際政治と国内政治を規定し、政治を至済に先行する時代に於て、このことは決定的である。互保保口、東南アジア共同防衛團構想、帝国主義軍隊への向口、ベトナム参戦、沖繩返還、自衛隊の強化として、政治過程に登場し、日本帝国主義は困難な正面戦を決定しつつある。その中に於て、自衛隊は「後進人民武装斗争への海外派兵」「中への核武装」「ナシヨナリズムの統治的徴兵制」「階級的抑圧」「治安出動」といつマルシヨア主義の全意志を表現する、帝国主義軍隊、帝国主義國家権力の中核として強化されてゐる。

三階級向けこのマルシヨア國家の運動法則は、行政権の肥大化、改進黨実力から新体制への移行をイデオロギイ、攻勢にまつて行なつたのとてある。ベトナム参戦、沖繩返還といつて、策と改進黨実力を東南アジア共同防衛團構想といつて、新体制への媒介するのな極策の防衛といつて、幻想の国際主義、自衛隊の強化（連軍参加、東洋派の寄港、通商者各法、三又防衛）の政略的防衛ナシヨナリズムを、媒介に、帝国主義軍隊（海外派兵、核武装、徴兵制、治安出動）に結合するのである。

三階級主義軍隊、帝国主義國家権力の中核であること、行政権の肥大化、改進黨実力、攻勢、新体制といつて、運動法則の循環的分解、行政権の肥大化であり、構造的な分解を行なはなくてはならない。

何故なら、内外路線に於て、日本帝国主義は「東南アジア太平洋地域南発構想」「国内重化学工業の計画的発展」から「東南アジア共同防衛團構想」「帝国主義軍隊」に転換しつつも、国内路線に於ては「重化学工業の計画的発展」「重工業に属労働者」のマルシヨアを維持し、「帝国主義軍隊」「ハル、ルンペン」などのマルシヨアに、今日明確に、移行してゐるといつて、是れである。からである。

二の移行は、早晩行なわれざるをえない、要因は、次の通りである。
 (1) 是れは既に述べた如く、海外路線に於て、転換してゐることである。
 (2) は、行政の全面化と共に、自衛隊、民社党、皇朝産業に、官庁労働者を、立脚基礎とする、マルシヨアの結合の内容を、至済ナシヨナリズムへ

因論一編述國家論から自主階級一極東の階級階級に移行して

二の二である。日本帝國主義の正面戦を決議して二に

現在の内政政治又ロソクと階級階級階級を維持する至極的物質的基礎を喪失しつつあることである。何故なら、

二の二の階級階級にさる収約は、二の二の階級階級にさる収約は、二の二の階級階級にさる収約は、

千想される恒公的公的の反合理化斗争を軸とする労働者階級の自然発生的な至極的の階級に對しては、

日本帝國主義の至極的の階級に對しては、日本帝國主義の至極的の階級に對しては、

政治的の至極的の階級に對しては、政治的の至極的の階級に對しては、

である。オーストリア階級階級で形成される階級の永續性と結合して

階級階級の永續性と結合して階級階級の永續性と結合して階級階級の永續性と結合して

階級階級の永續性と結合して階級階級の永續性と結合して階級階級の永續性と結合して

階級階級の永續性と結合して階級階級の永續性と結合して階級階級の永續性と結合して

階級階級の永續性と結合して階級階級の永續性と結合して階級階級の永續性と結合して

階級階級の永續性と結合して階級階級の永續性と結合して階級階級の永續性と結合して

階級階級の永續性と結合して階級階級の永續性と結合して階級階級の永續性と結合して

体制として存在し、二れと対決する日本反戦斗争の結合を提議し、

この日本反戦斗争を至人民の利益を最も先進的に担つていようと

二の二の階級階級にさる収約は、二の二の階級階級にさる収約は、二の二の階級階級にさる収約は、

二の二の階級階級にさる収約は、二の二の階級階級にさる収約は、二の二の階級階級にさる収約は、

二の二の階級階級にさる収約は、二の二の階級階級にさる収約は、二の二の階級階級にさる収約は、

二の二の階級階級にさる収約は、二の二の階級階級にさる収約は、二の二の階級階級にさる収約は、

二の二の階級階級にさる収約は、二の二の階級階級にさる収約は、二の二の階級階級にさる収約は、

攻勢し新体制というサイケルのくり返すにまつて支配可能なのは、現代資本主義の高度の組織の発展の引き起こしと分散化の可能なものがある。二の二つは隣接するならば、「組織された暴力」は当面その基礎を失ふ。ルンペンにまつということ。ポロリタリマート本隊にはその最も先進的意図的部分（前衛）にのみその直接の基礎をもちえるというところである。従つてポロリタリマート本隊内部に在る二の前衛の任務は組織的運動の発展に提出されることになる。①「具体化された政治主義」に基き、意図的な政治宣伝と大衆を不断に政治的組織化する事。②「政治的組織」に在る運動形態は徹底的に直接民主主義を提起し、「組織された暴力」を支援し、かつ自らの中にこれを含み入る事。この方向への本隊の発展の要因は、テネリリベ平原にまつて既に先駆的に開始されたこと。③「暴力」に基き、破局、至極の自然発生的の高揚、ゼネスト、自然発生的な暴力の登場を行きつゝ、政治的権力向きの提議される状況を、至極にわたる政治ストへの転化、自然発生的暴力と組織された暴力の結合、ソウエトによるポロリタリマート本隊へ発展させるべき主体的準備を行なうことである。それは現局面にあつては、政治的組織の意図的な、直接主義に基き、提起、「組織された暴力」「直接民主主義」としてのその展開、他方に在る至極の争の徹底として行なわれることである。

以上述べた、大衆的理論的争い組織的争いの二つは、互いに反り返り、帝国内部家権力を支え、ポロリタリマート本隊の中に世界革命のハゲモノを形成する構造な陣地戦である。

④ 互に保つるべきの運動の構造は次の様に定型化されることとなる。日本帝国主義の「東南アジア共同防衛圏構想」「帝国主義軍隊」という世界再分割に對し、「防衛的機動戦」を対決せる。その内容は「具体化された防衛主義」と「組織された暴力」である。帝国内主義軍隊を中核とする帝国内部家権力への向けての運動に對して「陣地戦」を展開せる。その内容は「行政権の肥大化」「既成事実化」「テデオロイ攻勢」「新体制」に對する「大衆的理論的争い」「組織的争い」である。

⑤ として、我々は「二の運動構造」に基き、組織路線の構造を提議する。社会同の基本的な任務は、至極の學生運動を、大衆的争いに在る中核に「組織された暴力」として再編する事である。

地区細胞（党）の任務の中心は地区反戦を大衆的争いに在る中核に、ルンペンに立脚して「組織された暴力」の組織体とする事。他にこの地区反戦を「組織された暴力」とポロリタリマート本隊との結合の要とする事。ポロリタリマートを直接民主主義に立つ政治的争いへ向け、目的意識的に組織する事である。

至極細胞の任務は、既に述べた組織的争いである。その戦術的取点は、政治的争いの蓄積を豊富で、かつ合理的攻撃をアルシヨマジの側から目的意識的にかけられ、その意味で大衆の自然発生的な形成されたつある言ひ、公的争いである。二に在り、互に保つるべきの政治ストを實現する事である。

⑥ として、我々は「具体化された防衛主義」「世界革命の戦術的争い」に

基き、理論的争いを展開する。前衛的争いの過渡的組織「党内論争」から急進的に「全国的な単一の前衛」へ発展する事である。

次に社会同の任務を明確にしておこなうことである。次に、全社会的な階級的観点から要求される學生運動の任務は「組織された暴力」の中核である。次に、このなかで、學生は「テネリリベ平原」に民諸階級階層の「テデオロイ」を直接反撃し、分解を最速に進行している事である。従つて、ルンペン、ポロリタリマート代表する部分、ポロリタリマートの意図を代表する部分、アルシヨマジの意図を代表する部分の分解に對して、社会同は、その全回民階級階層に對して行なうと同様の、総合的体系的有機的指導を學生大衆に行なうことである。

この二点は、大衆的争いに在り、力の出さざるの構造を、その運動を表明し、それを防衛主義で統一する事である。次に、組織された暴力の部隊を形成すること。次に、直接民主主義に立脚し、この組織された暴力を支援し、不断にこれに発展して行く大衆全体の運動である。二の二つの徹底した意志統一を我々を左右の日和見主義から救う唯一の道であること。これを、つぎと確認する。次に、その任務を明確にする。公的争いの政治ストを實現することの意味を、防衛的争いと我々の暴力との対抗闘争の中核に、ポロリタリマートに在り、互に保つるべきことである。次に、その結果は、互に保つるべきの政治的争いと組織された暴力の二つである。互に保つるべきの政治的争いと組織された暴力の二つである。互に保つるべきの政治的争いと組織された暴力の二つである。

イれつつあるのに対抗して、マルシヨマミーが我防隊で「民族秩序の擁護」を軸に強ひつつあることの表現である。ゆゑの均衡関係は、いずれ、自衛隊の治世出陣にまつて破らざるであらう。この年空保と云う言葉を先行せしむるにしても、我々は主体的に目的意識的たそれに対抗する準備を進めなくてはならぬ。我々は、この自衛隊の治世出陣に對抗する暴力として、従来の政治スナブで意識的に準備して置く必要はない。階級戦争は暴力を軸とした本格的時代へ突入し、革命の戦略戦術も、抽象性の段階より、具体的な時代へ入つたことを再確認しなければならぬ。

入五

特に、具体的な大衆斗争の方針を統一してあげなければならぬ。

当面の焦点は、日米会談以降の七の年空保の一つの具体化、又トナム参成日化の一歩の進行、台湾エンタープライズ寄港阻止斗争である。

政治方針で留意しなくてはならないのはこの二つである。日本帝国主義の日本空保の七の年空保の要なる準備を整へるの布石、小笠原返還との取引きであること、ことである。従つて、日本帝国主義は北緯返還へ向けて第一、又トナム参成日化と軍事力強化、軍事介入、モニーの強化を推進するといふことを徹底して宣伝しねぐことである。

そして、オニに、斗争戦術に於ては一月空保隊力斗争を提起し、これへ向けて独自の準備を直ちに開始することである。

オニにゆゑる実力斗争へ向けて、大衆を結束する斗争、ヨシヤ、ヨシヤ

に止断する斗争、大衆斗争である。そしてこの斗争は、日米アメリカ及び我斗争に呼応して、日米ソロタリアートの民衆七の年空保へ向けて共同の戦列を組むことの開始である。我々は、オニに、この日米斗争を対抗者階級をもぎぎ込込込込斗争として実現すべく、又平運、反成青年赤衛隊の共闘し込みと組織的介入を行わなくてはならぬ。